



評価のモダリティを表す助動詞「べきだ」

高梨, 信乃

(Citation)

神戸大学留学生センター紀要, 11:1-15

(Issue Date)

2005-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/00523030>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00523030>



評価のモダリティを表す助動詞「べきだ」

高 梨 信 乃

キーワード：評価のモダリティ、助動詞、話し手の発話時の評価

1. はじめに

ある事態が実現することに対する、必要だ、必要でない、許容される、許容されないといった評価的な把え方を示すモダリティを評価のモダリティと呼ぶことにする。

本稿で扱うのは、次のような評価のモダリティを表す助動詞「べきだ」である。

(1) 「いまは、とにかく一休みさせてやるべきだ。たとえ一年おくれようと、目的さえ達せられればいいじゃないか」 (素直な戦士たち p.271)

(2) 「(略)しかし、流水の網走は一度ごらんになるといいですよ。これは見せてあげたいな。でも、流水は一人で見るべきかも知れないな」

(続・氷点(下) p.78)

本稿は、「べきだ」の意味・用法を記述すると同時に、評価のモダリティにおける「べきだ」の位置づけを検証することを目的とする。

「べきだ」は、若干かたい語感をもつため、くだけた話しことばでの使用頻度は高くないが、改まった話しことばや書きことばではよく用いられる。これまでもいわゆる「当為」や「価値判断」を表す形式の代表的なものとして言及されてきた。

本稿でも、「べきだ」を評価のモダリティの中で重要な位置を占める形式と考える。その理由は「べきだ」には次の二つの特徴があるからである。

① 「べきだ」は評価のモダリティ専用の助動詞である。

② 「べきだ」は文末では常に〈話し手の発話時の評価〉を表す。

さらに、「べきだ」の用法を詳しく見ると問題になるのは、古代語の「べし」との関連である。

以下では、次の順序で考察を進める。2では、上で述べた「べきだ」の特徴①の重要性について見る。3では、「べきだ」の意味と用法を見る。4では、「べきだ」の特徴②とそれに関わる現象について述べる。5では、名詞修飾の形「べきN」との関連から古代語の「べし」について触れる。6では、否定の形「べきではない」について述べる。

2. 形態面から見た「べきだ」

ここでは、1でみた「べきだ」の特徴①について述べる。

評価のモダリティを表す形式は多数あるが、形態面からみると、次の3つに分類できる。なお、()の中の形式は異形態として同様に扱う。

①助動詞

「べきだ」、「ものだ」、「ことだ」

②「-いい/いけない」型複合形式

「といい」「ばいい」「たらいい」、「ほうがいい」、「てもいい」、「なくてもいい」、「てはいけない」(「てはならない」)、「なくてはいけない」(「なくてはならない」「なければならぬ」「なければいけない」「ないとはいけない」)

③「-いい/いけない」型以外の複合形式

「必要がある」「必要がない」、「ことはない」「こともない」「までもない」「ざるを得ない」「ないわけにはいかない」「しかない」etc.

上の分類のように、評価のモダリティ形式の大半は複合的な形式が占める。複合形式としての固定化つまり文法化の度合いは、個々に差があるものの、全体的に低いといえる。その中であって、「べきだ」は数少ない助動詞の一つである。

しかも、「べきだ」は評価のモダリティ専用に使われる形式である。他の助動詞「ものだ」「ことだ」は、それぞれ複数の用法をもっており、評価のモダリティを表すのはその一部にすぎない。また、評価のモダリティを表す場合についても、「ものだ」「ことだ」が使用できる範囲は限られており、行為者にとれる人称、質問文になりうるか、反事実を表すことができるかどうかなどの点で、制限がある¹⁾。「べきだ」にはそのような制限はない。

このように、「べきだ」は評価のモダリティ専用の助動詞であるという点で重要である。

3. 「べきだ」の意味と用法

この節では、「べきだ」の意味と用法を、類義形式「なくてはいけない」「ほうがいい」と比べつつ見ていく。

3. 1

高梨(2002)で提示されたように、評価のモダリティ形式は、意味の面から見ると、

〈必要妥当系〉〈不必要系〉〈許容系〉〈非許容系〉の四つに分類することができるが、「べきだ」は、そのうちの〈必要妥当系〉に属する。

「べきだ」の基本的意味は「当該事態が妥当である」という評価を表すことである。

- (3) 「真実をありのまま、話さない。人間は、嘘をつく時と、本音を吐くべき時、と、ある。しかし真実の方が強い。捨て身の時は、真実で、行くべきだ……いいね、誠実に、話さないよ」

(砂糖菓子が壊れるとき p.66)

- (4) [その場にはいない「お父さん」の浮気についてみんなで話している場面]
卷子「だったら、お父さんとその人が別れるべきよ。(鷹男に) ねえ、当然じゃない？」

鷹男「まあ、そうだろうなあ」 (阿修羅のごとく p.40)

- (5) 「メイクの料金、たったの千円よ。一生に一度だもの、あたし頼みたいいな」
「一生に一度だから、自分ですべきよ。他人にやってもらうと、別な顔になっちゃうから」なにになにすべき、というのは桃子の口癖である。

(胡桃の部屋 p.109)

- (6) 「医者へは行きました？」「行ってない。何処も痛むわけじゃなし」自分では鏡を見たって、ちっともやつれてはいないのだから。「行くべきだな」

(異人たちとの夏 p.140)

(3) のように一般的な事柄について述べる場合も、(4) のように個別的事柄について述べる場合もある。(5) (6) のように当該事態が聞き手の未実現の行為である場合、働きかけの機能が生じ、〈勧め〉の表現となる。

次のように「Pするべきかどうか」、「Pするべきか、Qするべきか」の形で用いられることも多い。当該事態の妥当性についての評価がまだ出せず、検討中であることを示す。

- (7) 独身の女性なら、誰もが一度は、人参を食べるべきかどうかを真剣に考える。
(クロワッサン症候群 p.244)

- (8) 家族の五人目は、義文の母たえ子、68歳だ。実は、この表札のどこにたえ子の名前を書くかという問題をめぐり、片倉家で紛争が発生したことがあった。義文の母親であり、片倉ハウスの先代の経営者夫人であるたえ子に敬意を表し、現在の経営者であり世帯主の義文の名前より先に書くべきか。それとも、現在は隠居の身であるたえ子が一歩下がり、長男の春樹の

名前の後ろに、ひっそりと寄り添うべきか。(理由 p.87)

「べきだ」の否定の形は「べきではない」である。「べきだ」の前に否定形がく
ることはない。「べきではない」については、6で改めて見る。

(9) 行くべきではない。

(9) *行かないべきだ。

3. 2

「べきだ」は、「なくてはいけない」「ほうがいい」と同じ文脈で使える場合がある
ので、これらの形式との意味の異同が問題にされてきた(丹羽(1991)、郷丸
(1995)、野林(1996)など)。

(10) 若いうちにいろいろな人と {付き合うべきだ/付き合わなくてはいけな
い/付き合ったほうがいい}。

意味の面から見ると、「べきだ」は「なくてはいけない」よりも「ほうがいい」
に、より近い。

この点については、森山(1997)(2000)に重要な指摘がある。森山は、「なくては
いけない」を、一つの事態にだけ価値付与し他の選択を許容しない「絶対価値付与
型」、「べきだ」と「ほうがいい」を、相対的な価値を表す相対価値付与型とした。
両者の違いは、次のような「別選択許容テスト」に通るかどうかで確認される。

(11) 別選択許容テスト (森山(1997)(2000))

*~なくてはいけないが、しなくてもいい。

~した方がいいが、しなくてもいい。

(本来は) ~するべきだが、しなくてもいい。

逆に、当該事態が選択の余地なく必要とされる場合には、「なくてはいけない」が
選ばれ、「べきだ」と「ほうがいい」はいずれも使えない。

(12) 車を運転するには免許を {*取るべきだ/*取ったほうがいい/取らな
くてはいけない}。

では、「べきだ」「ほうがいい」とはどのように異なるのだろうか。

まず、統語的な違いとして、疑問語との共起のしかたがある。「ほうがいい」は
もともと比較表現から成るため、二者からの選択に用いられる「どちら」「どっち」
などの疑問語としか共起しないが、「べきだ」にはそのような制限がない。

(13) どちらの大学に入る {べき/ほうがいい} が悩んでいる。

(14) どの大学に入る {べき/*ほうがいい} が悩んでいる。

(15) どのようにに勉強する |べき/*ほうがいい| かわからない。

次に意味的な違いを見よう。「Pするほうがいい」は、多くの場合、～P（「Pしない」）に対する否定的な評価を含意するので、(16) (17) のように当該事態が実現しないと悪い結果になるというニュアンスを帯びる場合が多い（高梨(2002)）。〈勧め〉というより〈警告〉に近い表現である。「Pするべきだ」では、そのような～Pに対する否定的な評価は含意されない。そのため(16) (17) のような〈警告〉の「ほうがいい」を「べきだ」に置き換えると、ニュアンスが変わってしまう。

(16) 傘を持っていったほうがいいよ。雨が降りそうだから。

(16') 傘を持っていくべきだよ。雨が降りそうだから。

(17) 知世子「おはよう」

志摩子「職員室行ったほうがいいんじゃないの？ 欠席のままになっちゃうよ」
(櫻の園 p.218)

(17') 職員室行くべきなんじゃないの？ 欠席のままになっちゃうよ

逆に、「べきだ」が選ばれ、「ほうがいい」がなじみにくい場合もある。(18) (19) のように当該事態の結果を問題にするのではなく、その事態が倫理や道德の上で望ましいもの、妥当なものであることを述べるような場合である。

(18) 勿論、一般論としては一夫一婦制を厳守すべきだという気はないし、男女の関係は自由であるべきだと思うけれど、(略)。(岸辺のアルバム p.49)

(18') 一般論としては一夫一婦制を厳守したほうがいいという気はないし、男女の関係は自由であったほうがいいと思うけれど、

(19) 「(略) 五体満足に生んでくれた親には、理屈ぬきに感謝すべきだと思うよ」
(続・氷点(上) p.210)

(19') 五体満足に生んでくれた親には、理屈ぬきに感謝したほうがいい。

(18) (19) は文として成立しないわけではないが、「べきだ」で表現されているような倫理的・道徳的なニュアンスは失われている。

このような点から「べきだ」と「ほうがいい」の間のニュアンスの違いが見えてくるだろう。それは事態の望ましさや妥当性の基準の置き方の違いである。「ほうがいい」がどちらかという現実的であり、どんな結果がでるかに重きを置く場合に使われるのに対し、「べきだ」にはそのようなニュアンスがなく、倫理・道徳面に基準をおく場合にも使われるということである。

以上、「べきだ」の意味と用法を見てきたが、意味の面から「べきだ」を他の〈必要妥当系〉の形式と比べると、非常に重要なのは、すでに触れたように、「べ

きだ」が文末で常に〈話し手の発話時の評価〉を表すということである。この点について、4で詳しく述べる。

4. 「べきだ」と〈話し手の発話時の評価〉

4. 1

高梨(2002)では、評価のモダリティ形式が表す意味に、純粹な主観的態度である〈話し手の発話時の評価〉と、主観からはずれる〈客観的必要性・許容性〉の区別が必要であることを述べた。〈客観的必要性・許容性〉とは、客観世界の秩序、しくみ、事情などのあり方として、ある事態が必要・不必要である、また許容される・許容されないということを描写するものである。

「なくてはいけない」「てはいけない」「てもいい」「なくてもいい」など多くの評価のモダリティ形式が〈話し手の発話時の評価〉のほかに、この〈客観的必要性・許容性〉を表す用法ももっている。以下に例を挙げる。

(20) [履修規則] 本コースの学生は前・後期で30単位を取得しなくてはならない。

(21) 向田 (略) 私たちの時代は、学校で見ていいという映画以外は見ちゃいけないかったです。ですから、そのあと「民族の祭典」だけでしたね、外国映画は。(略) (向田邦子全対談 p.253)

(22) 「年を取るとね、それほど食べなくてもいいように体がかわってくるのよ」 (ノルウェイの森(上) p.194)

「べきだ」には〈客観的必要性・許容性〉を表す用法はない。たとえば、(20)のような規則の説明に「べきだ」が使われることはない。また、(23)のような〈話し手の発話時の評価〉を表す文脈では「なくてはいけない」と同じく「べきだ」も使用できるが、(24)のように予定といった〈客観的必要性〉を表す文脈では「べきだ」は用いることができない。

(23) A「今日は虫歯の痛みがひどいんだ」

B「それは大変だ。すぐ歯医者に {行かなくてはいけない/行くべきだ} よ」 (話し手の発話時の評価)

(24) Aさんは歯医者に {行かなくてはいけない/*行くべきな} ので、早退しました。 (客観的必要性)

では、なぜ「べきだ」は、「なくてはいけない」や「てもいい」などがもつ「客観的」な用法がないのか。それは基本的意味の問題だと思われる²⁾。

たとえば、「てもいい」の基本的意味は「当該事態が許容される」ということである。「許容される」ということは、話し手の評価、つまりまさに主観的態度として成り立つ（例 (25)）一方で、客観的世界の秩序やしぐみ、または予定といったもののあり方としても成り立つ（例 (26)）。

(25) 「あんたら、おっかなかつたら、入ってもいいよ」 (男眉 p.121)
 〈話し手の発話時の評価〉

(26) この学校では、休日には私服で登校してもいいことになっている。
 〈客観的許容〉

「なくてはいけない」の場合も同様であろう。その基本的意味である「当該事態が実現しないことが許容されない（つまり、必要である）」といったことは、話し手の評価としても（例 (23)）、客観的世界のあり方としても（例 (24)）、あり得る。「許容」や「必要」は、許容されるかされないか、必要か必要でないかという、いわば1か0かで示すことができるような尺度であり、だからこそ秩序、規則、予定といった客観的世界のあり方の描写にも使用できるのだと思われる。

それに対して、「べきだ」はどうか。その基本的意味である「当該事態が妥当である」ということは、誰かが判断することである。話し手の評価としては成り立つが、客観的世界のあり方としてはあり得ない。それは「妥当」ということが、1か0かでは示せない尺度であり、主観において測られるものだからだろう。

このように「べきだ」の、文末で常に〈話し手の発話時の評価〉を表すという性質は、その基本的意味と関連するものだと考えられる³⁾。本来、モダリティとは、話し手の主観的態度である。「なくてはいけない」「てもいい」などが主観と客観の両方にまたがる意味領域をもつことに比べ、もっぱら主観を表す「べきだ」は、モダリティ形式としての真正度がより高いといえるだろう。

4. 2

さらに、常に〈話し手の発話時の評価〉を表すということは、「べきだ」の次の性質とも関連する。

それは、夕形すなわち「べきだった」の形で用いられると、必ず当該事態が実現しなかったという〈反事実〉の意味になるということである⁴⁾。

(28) 「俺は、ひどく後悔している」 呟くように彼はいった。「あの夜のうちに
 おまえの家に戻り、彼女がゴミ袋に入れて捨てたものを回収しておくべき
だった。(略)」 (友の助言 p.259)

(29) 「旅行鞆が軽過ぎましたね。足で引っかけて倒してしまった時に気付きました。生徒の方も軽々と運んでらっしゃった。あなた、最初から旅行なんて行くつもりなかったんです。自動車電話が鳴るのが分かっていたんです。嘘でももう少し詰め込んでおくべきでした」 (古畑任三郎 1 p.222)

この問題については、高梨(2004)で、次のような仮説によって説明することを提案した。

(30) 評価のモダリティ形式の〈反事実〉の仮説

「評価のモダリティ形式が 1) タ形で用いられ、かつ、2) 〈話し手の発話時の評価を表す場合、〈反事実〉を含意する。」

「べきだ」がタ形で〈反事実〉を表すということは、従来の研究でも注目されてきたが、それは「べきだ」が基本的に〈話し手の発話時の評価〉を表す形式だからである。しかし、〈反事実〉を表す用法は、「なくてはいけない」など他の評価のモダリティ形式にも存在する。(30)の仮説によれば、〈反事実〉を表すという性質が、「べきだ」のみならず、評価のモダリティ形式全体に共通する性質として一般化できる。

5. 名詞修飾の「べき」と古代語の「べし」

「べきだ」は「べきN」の形で名詞修飾に用いられる。

(31) バッハが見たこともなく、想像すらつかなかった楽器でバッハを演奏することが、本当にバッハの音楽にふさわしいのかどうか。それはぜひ問い直してみるべき問題である。(J.S.バッハ p.178)

(32) つまり、レポートに書くべきものは、事実と、根拠を示した意見だけであって、主観的な感想は排除しなければならないのである。

(レポートの組み立て方 p.10)

これらの例は、文末の「べきだ」と同じく、当該事態を妥当なものとする評価であり、特に問題はないだろう。しかし、興味深いことに、名詞修飾の形「べきN」は「べきだ」では表せない意味を表すことがある。それは、「論理的必然」と呼ばれる意味である。

「論理的必然」とは、「なくてはいけない」がもつ、基本的に条件節や理由節と共起して、論理の帰結としての必然性を表す用法である(森山(1997))⁵⁾。意味は認識のモダリティ形式「はずだ」に接近する。

(33) 1時間前に向こうを出たのだから、彼はもう着いていなくてはいけない。

(33') 1時間前に向こうを出たのだから、彼はもう着いているはずだ。

(34) 「(略) もしもブランデーグラスを使ったのが前日の夜や、あの日の朝なら、グラスもまた食器洗い機の中に入っていないなければならない」

(友の助言 p.249)

(34') グラスもまた食器洗い機の中に入っているはずだ。

「べきだ」にはこのような用法はなく、(33) (34) を「べきだ」に置き換えることはできない。

(33'') *1時間前に向こうを出たのだから、彼はもう着いているべきだ。

(34'') *グラスもまた食器洗い機の中に入っているべきだ。

ところが、名詞修飾の形「べきN」では、「論理的必然」を表すことが可能になるのである。次の例では「はずのN」に極めて近い意味になっている。

(35) もう着いているべき彼が、まだ現れない。

(35') もう着いているはずの彼が、まだ現れない。

(36) タコとペパーの決心は固く、その悪びれない、どこか自信に満ちた、けれどももたれるべき未来に、互いに身をひきしめて対峙しているような静かな表情は、私たちおとなの心配が取るに足らないもののように思わせるのだった。
(私たちが好きだったこと p.160)

(37) --それは、将来あなたと弟さんが相続するべき両親の財産のうち、あなたの取り分を先にもらったという形だったわけですか? (理由 p.218)

つまり、名詞修飾「べきN」の形では、「べきだ」に比べ、表せる意味領域が広くなるということになる。それはなぜだろうか。このような「べきN」の用法について、丹羽(1991)、中畠(1999)は古代語「べし」の用法の残存ではないかという見方を示している。

古代語「べし」は現代語の「べきだ」に比べはるかに広い意味領域をもっていたとされる(高山(1995)、大鹿(1999)、川村(1998)など)。ここでは川村(1998)の分類を参考にする。

(38) 「べし」の諸用法(川村(1998))

A類: 非現実事態の成立如何を巡る表現性を帯びる用法群

「推量」「可能」など

B類: 事態の妥当性を巡る表現性を帯びる用法群

「適当」「義務」「許容」など

本稿は現代語「べきだ」を対象とするものであり、「べし」の各用法の詳しい検

討はしない。が、川村の分類でいうA類が認識のモダリティ、B類が評価のモダリティにあたる意味領域であることは確かであろう。

古代語の「べし」の広い意味領域は、現代語「べきだ」では名詞修飾の「べきN」など一部の用法に跡をとどめるだけになった。しかし、かつて「べし」が評価と認識の両モダリティにまたがる広い用法をもっていたということは、「なくてはいけない」がもつ「論理的必然」や「てもいい」がもつ「論理的可能」の用法と同様に、評価のモダリティと認識のモダリティの交渉を示す事実だといえる⁵⁾。

なお、名詞修飾以外にも、古代語「べし」の残存と考えられる用法がいくつかある。いずれも古めかしい語感を伴い、使用される場面や文体は限られているが、このような用法も現代語の中に生き残っているとはいえるだろう。

[1] 妥当を表すと考えられるもの

・終止形「べし」

- (39) 選「レコ大」追加。秋吉敏子のライブ盤「ヒロシマーそして終焉から」
(ビデオアーツ)。今こそ聴くべし。(毎日新聞 2001.12.8)

・否定形「べからず」

- (40) 「どうだったかねえ、育児園は？」
「そうね、ひとことでいうと、……みだりに人の親となるべからず、
という感じよ」(続・氷点(上) p.229)

・「しかるべき」

- (41) カンタータは、まだまだ、しかるべきほどには聴かれていないと思う。
(J.S.バッハ p.201)

・連用形「べく」(目的の意味になる)

- (42) 僕を引き取ってくれた親戚の人はとても親切で、暖かい心を持っていた。
僕のことを本当の子供と変わりなく扱ってくれたし、僕が妙なコンプレックスを抱くことのないよう、いつも細心の注意を払ってくれた。そしてそういう好意に応えるべく、僕は家族の一員として振る舞った。他人行儀にならぬよう常に気をつけ、時には甘えても見せた。
(私が彼を殺した p.25)

- (43) ベルリンでは日本の代理大使が「日本の最も高名なる女流ピアニスト」
を歓迎すべく待機していた。(ピアニストという蛮族がいる p.178)

ただし、終止形「べし」には次のように妥当というより必然に近い意味を表す場合もある。

(44) 引っ越しでワゴン車を借りたら静かで驚いた。業務用でこれだから乗用車は推して知るべし。
(毎日新聞 2001.8.4)

[2] 必然を表すと考えられるもの

・「～べくして～する」

(45) 「ま、しかたないさ」

正寛はデッキのつまみを調節する。

「見てると、死ぬべくして死ぬ人間っているからね」 (カノン p.152)

(46) ただ、木一本、石一つでも、それがあるべくしてあるのであり、これは欠けてもよいというものが、一つもないということはわかった。

(続・氷点(下) p.245)

[3] 可能を表すと考えられるもの

・「べくもない」

(47) 順位だけを見れば、銅メダルを獲得した前回と比べるべくもない。しかし田畑は今回の世界選手権で、数字とは別の手応えを得たという。

(毎日新聞 2001.2.12)

(48) かつての村社会のような、地域が一体となった姿は望むべくもないが、幼児が危機的状況にあることを見逃し、あるいは気付いても何の手も打たなかったとしたら、この子の死の一半の責任は、地域社会の無関心にもあると言ったら言い過ぎだろうか。

(毎日新聞 2001.3.8)

6. 「べきではない」

最後に、「べきだ」の否定の形「べきではない」について簡単に見よう。

「べきではない」は、当該事態が妥当ではないという評価を表すことから、〈非許容系〉の意味になる。

(49) 男と女のことは、第三者が口を挟むべきではないと思っていたので、私も、気まずさを抱えたまま、仕事で疲れた心身を、四人の共同生活が与えてくれる奇妙な居心地の良さで癒していた。

(私たちが好きだったこと p.188)

(50) 「でもあなたは少くともウタナベ君をひきずりこむべきじゃないわ」

(ノルウェイの森(下) p.113)

(50) のように当該事態が聞き手の未実現の行為の場合、〈禁止〉の意味になる。次のように聞き手や第三者の既実現の行為について用いられることもある。この

場合、妥当でないと評価される事態が実現したことに対する〈不満〉の意味を帯びることが多い。

(51) 「どうして、あんな、試してみたいなことをロバに言ったんだ？ 静かにしのげるかなんて、曜子が口にすべきじゃないよ」

(私たちが好きだったこと p.221)

(52) 「(略) ねえ、あれは本当に淋しいお葬式だったんだ。人はあんな風に死ぬべきじゃないですよ」

(ノルウェイの森(下) p.252)

〈非許容系〉の意味を表す形式には、「べきではない」の他、「ないほうがいい」「てはいけない」などがある。これら3形式の違いは、「べきだ」「ほうがいい」「なくてはいけない」の3形式の間の違いと平行的に捉えられる。

「べきだ」と同じく、「べきではない」も文末では常に〈話し手の発話時の評価〉を表す。したがって、タ形「べきではなかった」が常に〈反事実〉を表すという性質も「べきだった」と同様である。

(53) 「淋しい葬式でしたね」と僕は言った。「すごくひっそりとして、人も少なくて。家の人には僕が直子の死んだことをどうして知ったのかって、そればかり気にして。きつとまわりの人に自殺だってわかるのが嫌だったんですね。本当はお葬式なんて行くべきじゃなかったんですよ。……」

(ノルウェイの森(下) p.247)

7. おわりに

以上、「べきだ」について考察してきた。

「べきだ」は、評価のモダリティにおいては数少ない助動詞であるだけでなく、基本的に、事態に対する評価という話し手の主観的態度の表明に限って用いられるという点で、評価のモダリティにおいて重要な位置を占める形式だといえる。

注

- 1) 「ものだ」「ことだ」の評価のモダリティとしての用法については、野田(1995)を参照。
- 2) 「てもいい」「なくてはいけない」の基本的意味については、高梨(2002)を参照。
- 3) この点については、「べきだ」と同様のことが「といい」「ほうがいい」などの評価のモダリティ形式にも当てはまる。
- 4) ただし、次のような小説の地の文で用いられる〈描出話法〉(登場人物の視点

と語り手の視点が融合した事態の描き方)は除外する。

・鳥須友紀は通勤組である。自宅は病院から徒歩で10分あまりのマンションに
独り住まい。若い看護婦としてはかなり豪勢な暮らしというべきであった。

(鏡の女 p.64)

5) 「てもいい」には、論理の帰結としての可能性を表す「論理的可能」の用法がある。

・1時間前に向こうを出たのだから、彼はもう着いていてもいい。

6) 同様の見解が益岡(2002)にも述べられている。

用例の出典

毎日新聞(『CD-毎日新聞2001データ集』日外アソシエーツ社)／磯山雅『J.S.バッハ』講談社現代新書／内田康夫『鏡の女』鏡の女 角川文庫／木下是雄『レポートの組み立て方』ちくま学芸文庫／篠田節子『カノン』文春文庫／城山三郎『素直な戦士たち』新潮文庫／じんのひろあき『櫻の園』『90年鑑代表シナリオ集』映人社／曾野綾子『砂糖菓子が壊れるとき』新潮文庫／東野圭吾『友の助言』『嘘をもうひとつだけ』講談社文庫／同『私が彼を殺した』講談社文庫／中村紘子『ピアニストという蛮族がいる』文春文庫／松原惇子『クロワッサン症候群』文春文庫／三谷幸喜『古畑任三郎1』扶桑社文庫／三浦綾子『続・氷点』角川文庫／宮部みゆき『理由』朝日文庫／宮本輝『私たちが好きだったこと』新潮文庫／向田邦子『阿修羅のごとく』新潮文庫／同『胡桃の部屋』『隣りの女』文春文庫／同『向田邦子全対談』文春文庫／同『男眉』『思い出トランプ』新潮文庫／村上春樹『ノルウェイの森』講談社文庫／山田太一『異人たちとの夏』新潮文庫／同『岸辺のアルバム』角川文庫

参考文献

- 大鹿薫久(1999)『『べし』の文法的意味について』『森重先生喜寿記念 ことばとことのは』, pp.51-71, 和泉書院
- 川村大(1998)「事態の妥当性を述べるベシをめぐる」『東京大学国語研究室創設百周年記念 国語研究論集』, pp.208-229, 汲古書院
- 郷丸静香(1995)「現代日本語の当為表現 - 「なければならぬ」と「べきだ」 -」『三重大学 日本語学文学』6, pp.29-39, 三重大学日本語学文学会
- 高梨信乃(2002)「評価のモダリティ」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃『新日本語文法選書4 モダリティ』, pp.80-120, くろしお出版
- 高梨信乃(2004)「評価のモダリティ形式のタ形について - 「べきだった」「なくてはいけなかった」「ざるを得なかった」 -」『日本語文法』4-1, pp.38-54, 日本語文法学会

- 高山善行(1995)「助動詞ベシと否定」『宮地裕・敦子先生古希記念論集 日本語の研究』, pp.146-164, 明治書院
- 中島孝幸(1999)「当然を表すモダリティ形式について－ハズダとベキダ－」『甲南大学紀要文学編』111, pp.左 15-28, 甲南大学
- 丹羽哲也(1991)「『べきだ』と『なければならない』」『大阪学院大学人文自然論叢』23/24, pp.53-72, 大阪学院大学
- 野田春美(1995)「モノダとコトダとノダ－名詞性の助動詞の当為的な用法－」宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(上)単文編』, pp.253-262, くろしお出版
- 野林靖彦(1996)「「～ベキダ」「～ナケレバナラナイ」「～ザルヲエナイ」－3形式が表す当為判断の連関－」『東北大学文学部日本語学科論集』6, pp.左1-11, 東北大学文学部日本語学科
- 益岡隆志(2002)「判断のモダリティ－現実と非現実の対立－」『日本語学』21-2, pp.6-16, 明治書院
- 森山卓郎(1997)「日本語における事態選択形式－「義務」「必要」「許可」などのモード形式の意味構造－」『国語学』188, pp.左12-25, 国語学会
- 森山卓郎(2000)「基本叙法と選択関係としてのモダリティ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法3 モダリティ』, pp.3-78, 岩波書店

A Modal Indicating Evaluation “Beki-da”

TAKANASHI Shino

The aim of this paper is to describe the usage of “beki-da” and to define the position of this form in modals indicating evaluation.

“Beki-da” is important in the following two points. 1) “Beki-da” is the only auxiliary which acts as a special modal indicating evaluation. 2) “Beki-da” always indicates the speaker’s evaluation at the time of utterance when it is used at the end of the sentence.